

八尾恒良（監修）

「胃と腸」編集委員会（編）

〔Ⅰ 上部消化管〕芳野純治，小山恒男，岩下明德（編集委員）

〔Ⅱ 下部消化管〕小林広幸，松田圭二，岩下明德（編集委員）

胃と腸アトラス 第2版

Ⅰ 上部消化管・Ⅱ 下部消化管

千葉 勉

京大教授・消化器内科学

初版以来十数年，待ちに待った「第2版」である。本書はとにかく，読んでいて，見ていて，「とても」楽しい。また疾患満載でとてもハンディである。しっかり見てもよいし，さっと見てもよいのが，本書の素晴らしいところである。

本書の最大の特徴は，やはり画像が素晴らしい点である。初版もそうだったが，今回は拡大内視鏡，NBI，小腸内視鏡などが加わって，さらに充実した。私たちが以前から知っていた疾患が，拡大，NBIで見ると，「ああこんなふうに見えるのだ」というふうに，まるで新しい疾患を見たかのような錯覚に陥る。食道のクローン病などがよい例である。実は先日，食道の変な粘膜欠損の患者が来院したのであるが，本書を見て「これだ」と思って，内視鏡をしたら，まさしく食道クローン病であった。

本書のもう一つの特徴は，重要な点が簡潔でありながら，細かく正確に記載，あるいは画像で明快に示されている点である。初版のときにも

書評で書かせていただいたが，例えばAA アミロイドーシスとAL アミロイドーシスのアミロイド蛋白の沈着部位の違い，GVHD の特徴的な画像，また自己免疫性胃炎の胃体部と幽門部粘膜の差，などが明快に画像や組織所見で示されている。

さらに本書では，極めて多くの疾患が扱われており，辞書のように使えることがうれしい。例えば，天疱瘡の食道や，里吉症候群，セリアック病など，評者が見たことがない疾患もあり，さらにリンパ腫やポリポーシスなど腫瘍性疾患の記載も幅広い。

本書の発行については，八尾恒良先生がすべての疾患に目を通されたそうだが，症例の選び方，構成の仕方など，やはり八尾先生の「すごい目」を随所に感じた次第である。

最後になるが，本書の第3版はいつになるであろうか？ 近年，例えば上部消化管疾患で言えば，*H. pylori* 感染率が低下してきたことによって，疾病構造の変化が生じ始めている。その結果，GNAS muta-

tion に特徴付けられる *H. pylori* 陰性の体部癌や pyloric gland adenoma が注目されるようになってきた。また新しい疾患として，九大グループから報告された fundic gland polypsis や，PLA2 遺伝子異常を伴い，非特異性多発性小腸潰瘍との異同が注目されている CMUSE (cryptogenic multifocal ulcerous stenosing enteritis)，若年性ポリポーシスと HHT の合併例など，新しい疾患，局面も集積しつつある。評者も来年退官だが，まだ先の話ながら，ぜひとも第3版を見たいもの，と心待ちする次第である。

〔Ⅰ 上部消化管〕

●A4/頁 400/2014 年

定価 本体 14,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01746-6]

〔Ⅱ 下部消化管〕

●A4/頁 368/2014 年

定価 本体 14,000 円＋税

[ISBN978-4-260-01747-3]

医学書院 刊